

## 会員研究

# 社会福祉の先駆者 赤帽子三楽

木村高久

### 1 はじめに

明治の横浜に、当時奇人・変人あるいは乞食の大将と呼ばれた赤帽子三楽（斎藤芳次郎）がいた。

彼は東京出身の理髪職人で、風体は小兵にして背中や両腕に入墨が彫つてある。性格は義侠心に富んでいるが、幼稚さと我儘とを併せ持った人物であつた。十三歳から三十二歳までは東京その他と横浜を行き来し無頼漢に近い暮らしをする。このため何度も生命の危機にさらされたが奇跡的に生き延びた。だが、それ以降は横浜で貧者救済のため尽力した人である。

ここで、彼の波乱万丈の人生を振り返つてみる。

### 2 生い立ち

三楽は、天保十年（1839）天保八年説あり）、江戸浅草田原町の武器骨董商の尾張屋（齋藤吉

右衛門）の三男として誕生する。

幼名は亀松。母おせちは出産時二十七歳で死去する。かねての約束から三楽は親類筋である八町掘の与力持田勝輔夫妻の養子となり恙なく育つた。そして実母の十三回忌法会の前夜、養父勝輔から実父は吉右衛門で実母は出産時亡くなつたことを知らされる。それまで従順に育つてきた亀松だが、養父の言葉を聞き頭の中で何かが弾けたようだ。人々から鬼か蛇かと嫌われ、不浄役人と蔑まれる与力職を一生の仕事としたくないと決意する。そこで、実母の法要が済んだ翌々日、養親から八両二分の金を盗み出し大阪目指して家出する。しかし、東海道藤沢駅の手前で追手に捉われ江戸へ引き戻された。

そして、実父・養父から、この様な不屈者は行く末犯罪者にで

もなるであろうと、台東区箕輪の梅林寺へ弟子として出される。時に嘉永四年（1851）八月で、亀松は十三歳であつた。

ところが亀松は、仏の有難味も理解せず腕白の限りを尽くす。このため住職もたまらず、勝輔を呼び出して亀松の不始末を話す。これを立ち聞きした亀松は実父吉右衛門のもとへ逃亡した。実父が説教をしているところへ養父もやって来た。そこで、「亀松よ、将来何になりたいのだ」と尋ねると、「私は鼠小僧のような大盗人になり、出来るだけ施しがしたい。」と述べる。これには、実父・養父ともあきれ果て、親子の縁を切り深川常磐町の公事師林芳兵衛へ養子と出す。名を芳三郎と改める。三楽はここでも我儘、気ままな生活態度で芳兵衛夫妻も愛想尽かし、刃物の研師の弟子とする。しかし三月と持たず、その後質店、骨董商、仕立屋、彫刻師などへ奉公させるも長くて三月で逃げ帰る。しかし京橋筑波町の髪結い「亀床」では性にあつたのか四年間辛抱し、続いて下谷車阪の髪結い「碓床」では四年勤めて一人前の髪結い職人となる。そして二十四歳の時、

### 3 青年期

京橋因幡町で初めて所帯をもつた。

生活が安定してくると三楽は寄席へ足繁く通うようになる。そのうち見様見真似で話上手となり高座に上がるまでになった。芸名は三松亭芳丸。やがて家業の髪結いに精を出さず所帯は破綻し、横浜元町の「眼玉の兼」という西洋散髪屋へ寄食することとなる。だが、ここも一年で飛び出し江戸へ舞い戻る。今度は下谷西黒門町に家を借り、昼は髪結いとして夜は素人落語家として評判をとるようになった。鼠窟客の中に金座役人の未亡人がいて、講釈師伯田との密会の手引きをしたことで百両のあぶく銭を手にする。ここで道楽心が出て、この金子を貧民窟へ行き貧民百人以上にばら撒いたのである。「人に施すことは、この上ない喜びである」と三楽が述べたという。

ある日、世話になつてゐる西黒門町の大地主連中から彰義隊の人々に金・兵糧をかす貸付役所を設けるので貸付方を頼みたいと言われ承知する。三楽は日々彰義隊の兵糧方へ入り込み所用の合間に

は小役人や人足達を集めてお得意の落語を語り、また髪を結び、ひげを剃るなどで隊長から下士にいたるまで友達のように思われていた。ところが三楽は薩摩の間者であると密告され、あわや首を刎ねられようとした。その時、三楽の度胸にほれ込んだ岡島副隊長が殺害を止めて逆に彰義隊へ入隊を勧める。三楽は半強制的に彰義隊へ入隊させられ、兵糧方・裏方に従事することとなった。

ある時、山田吉之助以下七名の彰義隊士から、「軍用金調達のため資産家の所へ案内しろ、嫌なら門出の血祭りにする」と脅かされ、やむなく押し込み強盗の片棒を担がされた。実行後、彰義隊士七名を奥州路へ脱走させたが、三楽は役人に捕縛され会津屋敷の糾問所で厳しい拷問にかけられる。しかし三楽は固く口を閉ざす。役人は一思いに毒殺しようとするが、丁度その時に明治維新(1868年)を迎え、改悛の状態あるものは徐々に開放することとなった。このため明治二年、三十一歳で三楽は放免となる。

出所した三楽は、以前住んでいた西黒門町へ行つたところ、昔高

座に出ていた仲間から寄付金を貰った。三楽はこれを元手に西洋理髪店を開店する。しかし、客がなく一文無しとなる。そこで、再び横浜へ夜逃げする。丁度その頃、市内に萬竹という席亭があり三遊亭小三馬などが興行の最中であつた。昔の誼で、彼は芸名を三楽と改めて萬竹亭の高座に上がらせてもらえることとなる。高座で自身が経験した彰義隊について話した

のが大評判となるが、逆に芸人仲間の嫉妬をかい一年後に止めざるを得なかつた。そこで新たな女房をもらい水屋稼業を始める。客寄せのため、店先に等身大の女人形に女房の着物を着せて立てかけた。これもあつて商売はあたり五〇兩近くの金を得ることが出来た。ところが仕入れ屋へ向かう途中で借金返済に困りはてていた娘に十両を与えてしまう。また家に戻ると泥棒に入られ残りの金子を奪つて逃走されていた。このため仕入が出来なくなり店じまいとなる。明治四年八月、三楽は、女房を実家へ追いやつて、単身上州浦和から前橋辺りを放浪する。ここで、ふとしたことから地回りの小桜組ともめ事を起こし殺害されそ

うとした時に、かつての彰義隊士山田吉之助に助けられた。

#### 4 赤帽子三楽期

明治五年七月、横浜へ舞い戻る。三楽三十三歳。ある冬の日、居留地の前を歩いていると、むさくるしい男がしきりに外国人に物乞いをしていた。三楽が男をよく観察すると健康そうであり、ただのズボラ人間であると見破る。そこで、お節介にも男に「人として物乞いは情けないことである。働くように」と諭す。そして得意の散髪や髭剃りをしてやりながら説得し改心させた。男の名は吉五郎といい、のちに三楽の仕事を支える信奉者になつた。

当時、居留地近傍を徘徊する物乞いは四・五百人いたという。そのまま放置すれば日本の外聞にもかかるし、彼らの仲間が放火・夜盗となるおそれもある。そこで三楽は、市内から物乞いを根絶し全員正業に就かせるとの貧民救助を志す。そのため第一番に多くの物乞い達を手なずけることから始めた。我が赤心は斯くの如くとの意で、緋色のビロードの帽子を被り、緋色の官軍の兵士のような服装

(通称、団袋)に身を固め、白き大旗に「仮の世に仮りに生まれて借りだらけ命の借りも共になしたや」と大書し、傍らに赤帽子三楽と小さく書いたものを押し立てた。そして助手の吉五郎を案内人に物乞いらの集まる所を歩き廻り、人の道を説き聞かせた。また、彼らの散髪をする。一年ほどで三楽の勇氣と熱意にほだされ、市内の物乞い達の多くは得心させられた。

次に彰義隊時代の関係で知り合つた榎本武揚から五十円の寄付を、その他紳商・紳士から寄進を頂き計五百余円となつた。これを資本金として戸田町太田に五百余坪の空き地を購入し、平長屋を建築して「矯正舎」と名付ける。そして市内の物乞い五百七十七人を収容し、洗心(出直しの意)の文字を染め抜いた浅黄木綿の衣服を着させた。収容した者は、体力に応じて草鞋あみ、マッチの内職、ホヤランプの掃除、紙屑拾い等の仕事を与える。生活は豊ではないが、人並みの暮らしが出来たという。このため、悪事を働く人は少なくなつた。

明治十七年には久保山の半腹に「帝釈堂」を建立しこれを「慈善堂」

と称する。さらに付近に百余坪の空地を買い入れ、葬式を営む費用がない者は無料にて葬式を出し埋葬した。その際、望む者には自ら読経をしたり、墓地の斡旋までも行った。

時には、古着を数百枚買い入れて大八車に積み込み、町々を引きながらポロをまとった人に施すこともした。

なお、三樂は困っている人がいると施しをするため、自身の生活は赤貧洗うが如しである。また、彼の欠点の一つとして妻や娘の生活には無頓着であった。

明治三十四年(1901)になると、三樂の夢は二丈五尺(8・5メートル)の自身の銅像を「慈善堂」の傍らに建てることで、寄付を募ったが多くは集まらなかった。結果として貧乏な庶民による寄付金で五尺(1・5メートル)の石像が横浜市南区三春台にある「新善光寺」の境内に建てられた。三樂にして老年になると名誉欲に駆られたのかと残念に思う。自ら銅像建設を要望しなくとも、いざれ誰かにより現在の石像は出来たであろうに。

しかし、物乞い退治の目的で始

めた「矯正舎」事業も、不景気なことから維持費欠乏となり中絶することとなる。その頃、妻子が横浜の末吉町に居住していて、三樂の衣食の面倒を見てくれた。明治三十九年(1906)三樂死去。享年六十七歳であった。



赤帽子三樂

### 5 おわりに

三樂は、当時、横浜、東京では知られた人物であったらしい。吉川英治の「忘れられぬ風物詩」に「九歳の秋、南太田に移った。この辺りには風変わりな人達が庵を結んでいた。赤帽子三樂は紙でつくった小旗とアメを持って子供に配っていたが、私の家にもときどき顔を見せ」とある。

三樂の評価は様々である。売名家、あるいは奇人、変人とも言われる。更に物乞いからピンハネし

ているとの中傷もあった。しかし物乞い達からの信頼は厚かった。彼には私欲はなく、貧者のために尽くしたからである。

大正時代になると宗教団体等により生活困窮者救済の慈善事業が始められた。そして、本格的な社会福祉の展開は、大正12年(1923)9月1日の関東大震災による大被害が契機となる。罹災した横浜に大阪府から被災者救済の見舞金を送られてきたが、これに国の支援金を併せて隣保館事業が開始された。さらに行政の社会福祉制度の拡充も図られた。

三樂は、これらの社会福祉制度の影も形もない時代に、単身で貧困者救済事業を実践した。しかも単に金銭を与えるのではなく労働の場を与え各人を自立させたのである。この功績は高く評価したい。近年、三樂を社会福祉のパイオニアと評する声もあるが、喜ばしい限りである。

ところで、破天荒な生活をしていた三樂が、何故三十三歳からは物乞いを無くすという生き方に変わったのか。思うに義侠心を含む元々の資質が挙げられる。それと三十二歳までの荒れた生き方から

得た貧者への共感と幾度も被害されそうになった経験からの悟りのようなものではないだろうか。

今日、横浜では三樂を知る人はほとんどいない。三樂の石像は、世の移り変わりをどのように見ているのだろうか。(了)

### 参考文献

- 1 「横浜名物 赤帽子三樂」 編集兼発行者 鈴木金輔 発行所 金槇堂
- 2 「横浜の忘れられた偉人赤帽子山樂」 山下泰平著 平成二十六年六月三十日発行
- 3 「史論集Ⅱ 郷土横浜を拓く」 田村泰治著 自主出版 平成27年4月出版
- 4 「南区の歴史」 南区の歴史発行委員会 編集兼発行 昭和五十一年三月三十日発行
- 5 「赤帽子山樂―齋藤芳次郎」 田村泰治作成 南区「みなみ郷土の歴史講座」資料 平成二十六年十二月四日発行
- 6 「調査季報60 盛り場であった伊勢佐木町 横浜盛り場小史」 神瘡起康著 昭和五十三年十二月発行